



[平成 31 年 1 月 9 日 定例会発表要旨]

北海道の恐竜とアンモナイト

札幌市立手稲中央小学校 教諭（三笠市立博物館ボランティア） 大和 治生 氏

海でできた地層の多い北海道白亜系からは、アンモナイトの化石がたくさん見つかっています。しかし、陸に棲む恐竜の化石はほとんど見つかっていませんでした。ところが近年、熱心な化石収集家によって、少しずつ発見されるようになってきました。



下段の表は、北海道で確認された恐竜について、簡単にまとめたものです。

後期白亜紀 マストリヒチアンの恐竜に、まず触れましょう。むかわ町穂別の山奥、材木を運び出すための作業道路脇の崖から、地元の化石愛好家によって、尻尾の化石がいくつも発見されました。穂別博物館に持ち込まれたものの、恐竜の骨と分かったのは、何年も経ってからです。崖をもっと掘ると、果たして全身が出るのか。半信半疑の人も多かったようです。数年かけて発掘し、恐竜のほぼ全身骨格が見つかりました。1 匹分がこんなに見つかったのは、国内初だそうです。「むかわ竜」と名付けられ、ニュースになりました。国内最大級の発見となる「むかわ竜」は、今年 7 月 13 日～10 月 14 日、上野の国立科学博物館で展示されます。機会がありましたら、ご覧ください。

重機で掘る何年も前、私は化石を探すために穂別のこの辺りを歩いて、後期白亜紀マストリヒチアン下部にあたる地層から、アンモナイトをいくつか見つけました。アンモナイトは、時代を細かく決めるのに大変役立ちます。

時 代	恐 竜	産 状	同時代のアンモナイト	
新 ↑ 中生代 後期白亜紀 ↓ 古	マストリヒチアン	むかわ竜 ハドロサウルス類	ほぼ全身(8割)・地層から むかわ町穂別博物館蔵 小林快次先生が研究	パキディスカス・ジャポニクス ノストセラス・ヘトナイエンゼ
	カンパニアン	テリジノサウルス類	手や指・転石 中川町エコミュージアム蔵 平山廉先生が研究	キャナドセラス ユーパキディスカス
	サントニアン	ハドロサウルス類	骨盤と大腿骨の一部・転石 小平町文化交流センター 長谷川善和先生が研究中	ポリプチコセラス ヨコヤマオセラス・イシカワイ
	コニアシアン	ティラノサウルス類	尾骨1個・転石(芦別産) 三笠市立博物館蔵 小林快次研究室で研究	メソプゾシア・ユーバレンシス
	チューロニアン	未発見		
	セノマニアン	ノドサウルス	頭部半分・転石(夕張産) 三笠市立博物館蔵 早川浩司先生が研究	キャリコセラス



パキディスカス・ジャポニクス



ノストセラス・ヘトナイエンゼ



アナゴードリセラス・コンプレッサム



パタジオサイテス・コンプレッサム

上の写真は、「むかわ竜」と同じ時代のマストリヒチアン下部の地層から産出したアンモナイト化石です。

右の写真の化石は、同時代のカニと、大型動物の背骨。背骨の化石にはスポンジ状の穴が開いていて、茶色や黒色をしています。



カニの化石



大型動物の背骨の化石



ティラノサウルス類の骨化石

平成30年夏。芦別市山中のキムン芦別で見つかった骨化石がティラノサウルス類として発表されました。時代は後期白亜紀コニアシアンで、本当のティラノサウルスよりは少し古いタイプです。北海道から大型肉食恐竜の化石が見つかったのは初めてで、三笠市立博物館に展示されています（写真左）。

三笠市立博物館は、アンモナイトの化石展示では日本一です。私も大変お世話になっております。

右の写真は、平成29年7月に、新種として発表されたアンモナイトです。左側の3個体は、羽幌産。右側の2個体は、三笠産です。いずれも私が発見して、クリーニングして三笠市立博物館に提供しました。学名は、ユーボストリコセラス・ヴァルデラクス（ゆるふわパーマの意味）。時代は後期白亜紀カンパニアン最下部になります。三笠市立博物館に展示されています。



新発見のアンモナイト化石

三笠市立博物館では2月5日～4月14日（月曜休館）、企画展として『北海道のアンモナイト～セノマニアン編』を開催します。博物館ボランティアの会員が持ち寄った、370個もの標本が並びます。皆さんも、一億年前の世界に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

なお、手稲郷土史研究会の定例会で、次のご質問をいただきました。Q1：エゾミカサリュウは恐竜ではなかったのですか？ ⇒きちんと研究する前に、学者が「肉食恐竜」とつぶやいたために、うわさが信じられてしまいました。研究が進んで、かなり大型のモササウルス類（海棲爬虫類）の頭であることがわかりました。Q2：化石採集できる場所はありますか？ ⇒黒松内町の川には教育委員会が採集を指定している場所があります。沼田町の化石体験館のHPには化石採集の案内が5月から出ます。三笠市立博物館では、川で化石を探す自然観察講座の案内が5月頃に出る予定です。

次回予定 ⇒ ①「グリーン大回廊をゆく」ノ宮博昭（手稲郷土史研究会 会員）・若松幹男（手稲郷土史研究会 会員）／②「平成30年度を振りかえって」（事務局）／3月13日（水）18:15～／手稲区民センター 3階 視聴覚室

新春所感

手稲郷土史研究会 会長 永井道允



平成最後の年の幕開けです。今年は手稲区が誕生して 30 周年という、記念すべき節目の年でもあります。まだ具体的になってはいませんが、手稲区として何らかの記念事業も開催されることでしょうか。手稲区から要請された場合には、協力を惜しんではないと思います。

昨年は図らずも「北海道文化財保護功労者賞」の受賞というたいへんな名誉に浴しました。わが手稲郷土史研究会の活動が、全道的な視野からも高く評価されたということであり、それにふさわしい活動を心していかなければなりません。

日常的な研究活動に加えて、新川運河部会の『新川ルネッサンス』への取り組みも多大の成果をあげて、「新川フットパス」「記念シンポジウム」「記念誌の発行」を終えることができました。新年度の計画は総会までに練り上げることとなりますが、沖田会員が心血を傾注して作りあげた手稲山を舞台に展開された『北海道造林合資会社物語』を、何とか出版にこぎつけ多くの人の目に触れられるようにしたいと思います。皆さまのお知恵とご協力をたまわりたいと存じます。

郷土史研究会が『手稲歴史年表』を刊行したのは平成 21 年 11 月ですから、ちょうど満 10 年になります。歴史は途切れなく続いています。長期間放置しておいていざ纏めようとするならば、たいへんな時間とエネルギーを必要とすることでしょう。いつ改訂版を発行するかは別にしても、将来に備えての準備も必要ではないかと考えます。

地道であっても郷土の歴史の研究成果を積み重ねてまいりたいと存じます。「手稲に歴史資料館を！」は手稲郷土史研究会誕生の基本理念であることを忘れることなく、機会あるごとに、広く手稲区民に関係機関に訴え続けていかなければなりません。一年間よろしくお願いいたします。

(平成 31 年 1 月 9 日 定例会)

遺構・遺物は語る

旧星置川の流れ

今回から「遺構・遺物は語る」と題して、手稲区内にある歴史、それも建物とか石碑などというようにきちんと保存・設置されているものではなく、人々にほとんど気づかれることなく、ひっそりとその痕跡をкаろうじて留めているが、近いうちにその姿を消してしまわんとするものについて紹介していくことにしたい。

第一回は、旧星置川の流れの痕跡を紹介したい。まずは写真をご覧ください。この写真は、一見すると溝らしきもので、何かの流れがあった跡にも見えるが、実は旧星置川の痕跡なのだ。場所は「ほしみ緑地」の西はずれの一画で、ちょうど札幌市と小樽市の境界線上のところに位置している。

この川は、大正、昭和に二度にわたる大幅な流路の変更（銭函への切り替えと石狩湾への流入のための直線化）が行われた。このため、昔から流れてきたこの場所には、ほとんど水が来なくなり、今や全く干上がってしまい、窪地として残っているだけだ。しかし、そうしたことがあったにもかかわらず、この地点を含めた旧星置川は、今も昔も札幌と小樽を区分けする行政上の境界線であることは変わらない。

写真を子細に見ると、河畔林だった樹々が残っており、むかし川であったことを偲ばせている。

村元健治（手稲郷土史研究会 会員）

星置川の流れの痕跡

